

坂本龍馬が 現代に生きている

— 広谷喜十郎氏（県立図書館郷土資料班長）



発想からきているといっても過言ではないでしょう。

また、海援隊をつくり日本の海を取り戻そうとしたその意志は、岩崎弥太郎に受け継がれたともいえます。不平等条約の撤廃に努力した外務大臣陸奥宗光は、海援隊の出身であり、龍馬の「外国と、対等な条約を結びたい」という意志を受け継ぎ、それを実現させました。また彼は北海道の開拓を考え、武市安蔵や坂本直寛らによって、その精神は見事に生かされました。

このように龍馬の精神は脈々と受け継がれています。

龍馬は生まれながらにして、人間として一番大切なこと、つまり自由と平等の精神を身につけていたと思います。そして、乙女姉さんへの手紙から分かるように、心はやさしさに満ちていました。

彼は劣等生だったからこそ、人の意見を聞き、それを分かつともいつも努力しました。私たちの世の中は、優等生が決してつくって来たわけではなく、いろいろな人たちが支え協力してつくってきたものです。

高知の子供たちが胸を張って、龍馬の生まれた土佐に生まれたと言えるように、土佐のすばらしさを子供たちに教えていくことが今、必要だと思えます。

土佐は陸の孤島であつて、決して豊かな国ではなく、むしろ後進地域でした。その後れた土佐からなせ、龍馬をはじめ武市端山ら勤王志士が立ち上がり、日本の歴史を動かすような運動を起こしていったのか。

私なりの考えですが、こんなことが言えると思えます。

龍馬は突然現われた英雄と言われませんが、決してそうではなく、高知県の歴史の中で龍馬的な生き方をした人も多く、その広いすそ野の突端に龍馬や退助が誕生したのだと思います。土佐を支えてきた、りっぱな人たちが、長い歴史の中には数多くいました。

紀貫之のことを考えても、貫之を運んだ船をつくる技術と、黒潮を渡る土佐の荒海を乗り越え運んだ土佐人がいました。長曾我部氏の時代に四国が統一されるわけですが、土佐にすぐれた武士がいたか

らこそ、統一が可能だったともいえます。野中兼山にしても、一人で地域開発をやったわけではなく、それを受け留める土地の人々がいないければ何もできません。

このように、土佐を支えてきた人物は次々と生まれ、それが連なり、幕末にすぐれた人物が出てくる条件はつくられていたのだと思います。

龍馬の一生をみると、最初の三分の一は泣き虫小僧で、今流に言えは落ちこぼれでした。次の三分の一は剣術に打ち込んだ時代。つまり人生の三分の二は、そう目立つことはしていません。そして残りの三分の一で、大変なことを次々とやってのけていくのです。

剣術に打ち込んでいたとき、すばらしい師勝海舟に出会い、そして家には乙女姉さんというすばらしい女性がいました。まさに、泣き虫であつた龍馬が硬い殻を破つ

てたくましい青年になる、その時代でした。

乙女姉さんのほかに、龍馬にかかわる女性はいく人もいます。例えば仲姉さんのお栄さん。脱藩前夜に、はなむけに嫁ぎ先の刀を渡したばかりに大問題となり、責任を取って自害してしまいました。それが証拠に彼女の墓はどこにもありませんでしたが、昭和四十三年、龍馬一族の墓の一番奥まったところで、密葬されたお栄さんの墓が発見され、百年後にやつと目の目を見ることになりました。現在は一族の墓と並んで葬られています。

このほか、初恋の人といわれる平井かほ、新婚旅行をしたお龍、寺田屋の女将、長崎時代のお慶、千葉道場の娘さな——など。

封建時代、女性は社会の片隅に追いやられていました。しかし、そういう時代であつたにしても、

女性がしっかりしていたからこそ、男性が世の中へ出ていけたともいえます。大切なことは、世の中の華やかな部分と、それを支えた部分を合わせて考えていくことです。

龍馬は、日本の歴史で大きな二つのことをしました。その一つは薩摩と長州を連合させたことで、それは今のイランとイラクを一緒にするほど難しいことでした。二つめは、大政奉還の土台づくりをしたことです。絶大な権力を持っていた徳川幕府に、一介の浪人が根回しをしてこの大事業を成し遂げてしまったのです。

龍馬は、政治家、経済人としての発想を当時から持っていました。そして、その意志を受け継いだ人々がいます。

明治の五箇条の御誓文は、龍馬の船中八策にうり二つであり、龍馬の考え方が生きています。まさに明治政府の最初の号令は、彼の